

足跡姫



ときあやまってふゆのゆうれい
時代錯誤冬幽霊

射程の長いテーマと、それをダイナミックかつ柔らかく伝える演出で、演劇の波及力を自ら更新するNODA・MAP。新作『足跡姫』について、作・演出・役者の野田秀樹に聞いた。

近年、アフタートークやポストトークという時間を設け、劇作家や演出家が自作について解説する公演が珍しくなくなった。「もっと作品について知りたい」という観客の好奇心と、多少の説明をしても魅力は損なわれないというつくり手の自信が、うまく合致した現象と言えるだろう。同様に、インターネットのSNSなどでネタバレすることを気にしないつくり手も増えてきた。

そんな状況からすると、野田秀樹は旧時代に属する演劇人に見える。アフタートークの開催はゼロ、舞台を映像に残すことは(許可してはいるが)基本的に別物だと捉えているし、内容が事前に漏れることに関しては極めて厳しい。だが、新しいことに否定的でないことは、現在の日本の演劇に大きな影響をもたらしたワークショップやフィジカルシアターをいち早く導入したことから明確で、前述のストイックな姿勢も、舞台上足を運んでくれる観客が出合う驚きが、少しでも多く、先入観のないものになるようにするのが自分たちの責任でも考えてのことだろう。

というわけで『足跡姫』を巡るインタビューは、決して細かくストーリー等に触れるものではないが、奇しくも、舞台という表現に対する野田の想いと重なる内容となった。

——今、新作の内容について明らかになっているのは、勘三郎さん(十八代目中村勘三郎)へのオマージュであること、その葬儀の際の三津五郎さん(十代目坂東三津五郎)の弔辞が執筆の引き金になったと伺いました。とは

いえ、勘三郎さんの人生を演劇にされるわけではないですよね?

野田 それはしません。まあ、歌舞伎の始まりの頃のような話はどうかなあと。——『足跡姫〜時代錯誤冬幽霊〜』というタイトルは詩的な響きもありますし、「そくせき」と読むと歴史につながっていくような部分もあって、素敵だと思いますが、直感的に決められたのでしょうか?

野田 そうですね。足跡の話を書きます。非常に好きな響きです。

——「あしあと」という言葉の響きが? それとも足跡をつくる、歩いたり走ったりする足の響きが?

野田 それはどうでしょう(笑)。

——時代設定はいつですか?

野田 今のところ、江戸時代から飛ばないつもりです。

——三津五郎さんの弔辞が、非常に大きなきっかけになったとお聞きました。

野田 そうですね。「肉体の芸術ってつらいね。死んじゃったあとは何も残らないもんね」というふうに仰ったと思います。

——その言葉を、野田さんはどう受け止められたのでしょうか?

野田 「なるほど、上手いこと言うな」と。自分は書くという仕事があるからまだ残るけれど、彼らはそういう仕事なんだなあと改めて感じました。

今は(舞台も)映像で残せますが、それが余計にいやなんです。映像に上手く残せる人と本当に上手い人はまったく違うんですよ。そして、上手く残せることに長けている人が上手いふうに残るじゃないですか。こっちがいくら「そ

んなんじゃないよ、ビデオでは良く残っていないけど、この人のほうが全然すごいんだよ」と言っても、当のすごい人が死んでしまっていたら、そのままになっちゃう。

——確かに、編集しやすい演技や表情をする俳優と、そうでない俳優はいそうですね。そして編集しづらい俳優こそ、舞台上にしかない呼吸で動いているのかもかもしれません。

野田 勘三郎の、こういう言い方は誤解を生むかもしれないけれど、下品なアドリブをビデオで撮ってもつまらないと思うんですよ。落語家の先代の林家三平さんが持っていたようなサービス精神に近い、目の前にいる人たちの空気を温めさえすれば、まずはいいんだという迫力。芸術家ではなく芸能人(げいのうびと)の精神を持っていて、そこから発せられる言葉ですよ。あれをビデオに撮って残してねと言っても、その場に生まれた温かみ——ばかばかしさも含めて——や客席とのやり取りの空気は映るはずがない。そういうことをはじめとして、不満なんです。その人たちが生でやったものが映っていない映像が本物だと思われることは、……『足跡姫』はそういう話ではありませんけど、舞台をやり続ける限りはそのことは常に言っていきたいと思っています。

——数カ月前になりますが、蛸川幸雄さんの思い出を伺った折にも、蛸川さんがいかに優れた仕事をされたか、素晴らしい演出家だったかを、きちんと残さないといけないと野田さんはおっしゃっていましたが、語り継ぐということでしょうか?

野田 いや、語り継ぐことも、今のこのネット社会では、信用度がガクンと落ちてしまいましたよね。昔、本というものには責任が伴いました。書いた人、出版した会社がはっきりしていたから、嘘を書いたら「こいつは嘘つきだ」となりましてけど、ネットは、誰が何を根拠に書いたか検証されないうちにドーンと広がってしまうじゃないですか。そして1度広がると止めようがない。そうすると、語り継がれてもその言葉を信用していいか、常に疑いが付いて回る。あるいは「勘三郎・弔辞」と検索すれば三津五郎さんの言葉もすぐに出てきて、それをパッと見て「ああ、これが」でわかった気になってしまふ。

放たれてしまった気がするんですよ、しっかり持っておかなきゃいけなかったものが、その絶望感があります。もちろん、ネットの中でもちゃんとした言葉を発する人はいるし、人はそんなに馬鹿じゃないから、今の現象

が少し収まったときに何か対策が生まれたり淘汰があったりする可能性があるかと信じていたんですけど。

——映像ではなく、語り継ぐという形も取らず、演劇で、勘三郎さんが遺したものが観た人の中に息づくようになりたいということですね。

野田 そうなるといいですね。とは言え、僕もネットを使っていて、非常に便利だと思っています。検索して「ふうん」とか思ったりしていますからね(笑)。どうしても人間は便利なほうに流れるので、どこから自分でプレーキをかけるか。次の世代のほうがもっとそれを考えなくてはならないでしょうね。もしくは人間がネットに反撃するくらいのをしない。

——近年のNODA・MAP作品は柔らかな入り口から次第に特定の戦争の話へとスライドしていく構造です。今回は勘三郎さんのことから出発されている点から、もう少し個人的な話になるのかと想像するのですが?

野田 自分の、というか、演劇をやっている人間としての、言葉を書いているかもしれませんね、今。個人的と言えそうかもしれない。……でも、いつも個人的なんですけどね。自分の関心事を書いているわけですから。ただ今回は確かに、特に演劇をやっている人間だから書くものになっているかもしれないです。

——弔辞を読まれた三津五郎さんも昨年亡くなりましたが、その後に扇田昭彦さん、今年は蛸川幸雄さんといった方々が亡くなって、演劇人の死に対して野田さんのお気持ち、4年前の勘三郎さんのときはまた変わった点はありますか?

野田 勘三郎に対しては、年齢が一緒だということが僕の中では大きいんです。全く同じ世代の仲間がボンと死んでしまふ。と、自分もこういう終わり方がいつ来るかわからないと教えられるわけで。そのところでどうしても、このあと何本書けるだろう、何本つくれるだろうという意識は生まれますよね。そのとき、僕はずっと演劇をやってきた人間ですから、演劇をやり続けるのは当然なんですけど、身体を使うことも考えつつ、やっぱり書いておきたいという気が強くなるんです。それがどういうことなのか、自分でもまだよくわからないのですが。

——フィクションの力で歴史や現在に切り込みを入れるのがNODA・MAPなので、『足跡姫』も楽しみにしています。ありがとうございました。

取材・文:徳永京子



1月18日(水)~3月12日(日) プレイハウス

詳細はP10~P13へ

作・演出:野田秀樹

出演:宮沢りえ/妻夫木聡/古田新太/佐藤隆太/鈴木杏/池谷のぶえ/中村扇雀/野田秀樹

企画・製作 NODA・MAP 主催:NODA・MAP
共催:東京芸術劇場(公益財団法人東京歴史文化財団)



宮沢りえ 妻夫木聡 古田新太 佐藤隆太 鈴木杏 池谷のぶえ 中村扇雀 野田秀樹

